

J-45

海水浴場のバリアフリーイベントの有用性と認知度向上に関する基礎的研究 -バリアフリーイベントが行われる海水浴場を対象として-

Fundamental study on the usefulness and awareness of barrier-free event at beach,
- For beach with barrier-free event-

○坂口翔太¹, 山本和清², 宮崎渉³

※Shota Sakaguchi¹, Kazukiyo Yamamoto², Wataru Miyazaki³

Abstract: In recent years, at the beach. Barrier-free facilities - such as wheelchairs for slopes, etc. - are in place. However, there are few events incorporating barrier-free elements. For all people to be familiar with the ocean, we think that a barrier-free event is necessary. In this study, we went to a beach that is on a barrier-free event, and conducted a survey on barrier-free event to event participants. When participants who had no gain of barrier-free ended the event, they wanted further dissemination of the barrier-free event and future participation. Based on these results, it was confirmed that the barrier-free event at the beach was effective for giving participants a deep interest in barrier-free, and it came to the conclusion that everyone is necessary for getting close to the sea.

1. 研究背景

現在、日本では高齢化が進行している。総務省¹⁾の調査によると、平成 29 年 9 月 15 日時点で総人口に対する高齢者の割合は 27.7%だった。また、井上ら²⁾の意識調査によると多くの高齢者が海に魅力を感じ、入りたいと思っていることが報告されている。高齢化を背景に近年ではバリアフリーデザインの建物や設備が増えている。海水浴場でも少しずつではあるが、車椅子で砂浜を移動可能なビーチマットや、障がい者専用のトイレなどの設置などの施行がされ、海水浴場のバリアフリー化が進んでいる。

しかしイベントという視点で見ると、障がい者や体が不自由な高齢者を対象とした海水浴場のバリアフリーイベントはほとんどない。イベントは多くの人を集めるための手段として有効であるのでそれを高齢者や障がい者が海に参入するためのきっかけにし、誰もが楽しく安全に過ごすことが出来る海水浴場づくりが必要となっている。

2. 研究目的

本研究では、海水浴場のバリアフリーイベントの参加全てに対して海水浴場のバリアフリーイベントに関する意識調査を行うことで、誰もが楽しく安全に過ごすことが出来る海水浴場への発展の一助となる知見を得ることを目的とする。

3. 研究方法

3.1 研究対象地概要

研究対象地はバリアフリーイベントが行われている

海水浴場の 2 カ所を対象とした。2 カ所の対象地を Table.1 に示す。

3.2 研究方法

調査対象地である 2 カ所の海水浴場の現地にて実際にイベントに参加し、アンケート調査を行った。これによりまず対象者すべてにバリアフリーに対する意識の把握を行う。そして海水浴場のバリアフリーイベントに関する意見、有用性や今後の普及について調査し分析する。その結果得られる情報から、海のバリアフリーイベントの在り方や重要性について提唱する。調査内容については Table. 2 に示す。

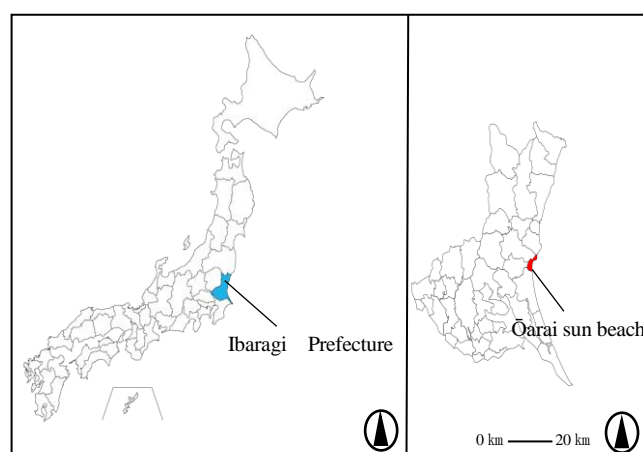


Figure1. Survey target area

Table2. Survey target beach

	Location	Beach
1	Ibaraki Prefecture	Ōrai Sun Beach
2	Hyōgo Prefecture	Suma Beach

1 : 日大理工・学部・海建 2 : 日大理工・教員・海建 3 : 日大工・教員・建築

Table2. Questionnaire survey contents

Survey target area	Oarai Sun Beach
Applicant	Event participants
Survey date	August 25th
Survey method	Hearing survey
Content of the questionnaire survey	Consciousness survey for barrier-free
	On the further diffusion of barrier-free events
Recovery rate	100%
Number of valid responses	Ten

4.結果

9月24日までに集計したアンケート調査内容を結果として記す。茨城県大洗町の大洗サンビーチにて海水浴場のバリアフリーイベント参加者から10件の回答を得た。

4.1 イベント参加者の障がいの有無

イベント参加者のうち、障がい者の割合は10%であった。天候不良により障がい者の参加者が予定より約80%減少した。

4.2 バリアフリー設備の必要性について

イベント参加者全員が水陸両用車椅子やスロープなどのバリアフリー設備が必要であると回答した。

障がいを持つ方はバリアフリー設備が整っていないと海に入ることが困難である為、設備されている事が前提条件であった。

また、健常者は自分がバリアフリー設備を利用しなくても、すべての人が海に親しむ為にはバリアフリー設備が必要だと考えていた。

4.3 海水浴場のバリアフリー化について

海水浴場のバリアフリーイベント参加者に海水浴場のバリアフリー化の進行の程度についてアンケート調査内容を figure2. に示す。

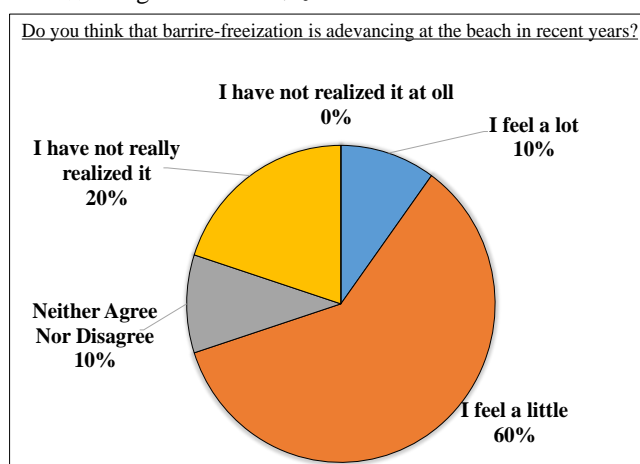


Figure2. survey on consciousness concerning barrier-free use of beach

Figure. 2より、海水浴場のバリアフリー化を実感していると回答したのはイベント参加者の70%であった。実感した理由としてはランディーズ利用者の増加や障がい者専用トイレやシャワーの普及にあった。

4.4 バリアフリーイベントの参加目的

障がい者やその家族はバリアフリーイベントを海に入り、様々な事に挑戦するためのきっかけにすることを目的に参加していた。

健常者は「なんとなく」、「楽しそうだったから」という動機のものが多かった。「バリアフリーについて知りたい」などといった、最初からバリアフリーそのものに関心を持ってイベントに参加していたのは全体の10%という割合になった。

4.5 バリアフリーイベントの今後の普及について

バリアフリーイベントの今後の普及や参加意欲について、参加者から得た回答を Table. 3 に記す。

Table3. The Perspective of the Barrier free Event

Do you want to participate in the barrier-free event of the beach in the future?	Yes: 100%
	No: 0%
Do you think that a barrier-free event like this is necessary as a trigger for all people to become familiar with the sea?	Yes: 80%
	No: 20%
Do you think it would be better to increase the barrier-free event of the beach?	Yes: 100%
	No: 0%

イベント参加者の大半が、参加前はバリアフリーにあまり関心を持っていなかったが、イベントを経てほとんど全員がバリアフリーや海水浴場のバリアフリーイベントに関心を持つ結果なったので、誰もが楽しく安全に過ごすことができる海水浴場づくりを目的とした海水浴場のバリアフリーイベントの有用性を確認できた。

5.まとめ

今回のアンケート調査から、海水浴場のバリアフリーイベント参加者が持つバリアフリーに対する意識を把握することが出来た。

バリアフリーイベントは障がい者や体の不自由な高齢者でも参加できる内容になっているが、参加者はほとんどが健常者という結果になった。今回のイベントが障がい者に与えた影響は少なかったが、健常者のバリアフリーに関する意識を向上するきっかけとなった。すべての人が楽しく安全に過ごすことができる海水浴場を造るためには、より多くの健常者がバリアフリーについての認識を持ち、バリアフリーイベントを積極的に開催する必要があると結論付けた。

今後も多くのイベント参加者に対してアンケート調査を行いバリアフリーイベントのあり方を追求していく。

6.参考文献

- 総務省統計局：平成30年人口推計
URL: <http://www.stat.go.jp/data/topics/topi1131.html>
- 井上雅夫ほか2名：「海水浴場のバリアフリーに関する現地調査」、海岸工学論文集, 第48巻, pp. 1341-1345, 2001
- 大洗サーフライフセービングクラブ
URL: <http://elnino.jp/>
- NPO 法人須磨ユニバーサルビーチプロジェクト
URL: https://peraichi.com/landing_pages/view/sumamap
- イベントによる海岸の利活用に関する研究
URL: https://www.jstage.jst.go.jp/article/journalcpj/50/3/50_1137/_pdf